

## 研究会の活動終了

技術交流研究会は、今から 27 年前の昭和 61 年 8 月 5 日に「工業技術研究会」という名称で異業種交流を目的に建設部門以外の部門の技術士らが 10 人集まって活動を開始しました。それらの活動は、平成 24 年 12 月の第 128 回まで続きました。しかし、それらも会員の高齢化や北海道本部を取り巻く環境の変化等を考慮して平成 24 年度をもって活動を終了することと致しました。

これまでに当研究会会員の皆様は勿論のこと、北海道地域本部会員並びに会友各位には長期間ご支援いただきましたことを誌面をお借りしてお礼申し上げます。

### ■活動終了にあたって

技術交流研究会会長

松井 義孝(建設部門)

技術交流研究会を終えるにあたり、これまで多くの方々からご支援いただき感謝申し上げますとともに、厚く御礼を申し上げます。

技術交流研究会(旧工業技術研究会)は、日本技術士会北海道支部(北海道技術士センター)会員の大半が建設部門であったことから建設部門以外、かつ入会の条件は日本技術士会の会員に限るという厳しく、かつ格調の高い研究会として始まりました。その条件の一つである建設部門技術士の参加は、菱川技術士の入会を口切りに他の建設部門技術士の入会も可能となりました。しかし、もうひとつの日本技術士会会員資格を有する条件は今でも貫かれておりました。

私の入会は、平成 3 年前後であったかと思えます。当時から元会長であった菱川技術士から「松ちゃん、まっちゃん」とかわいがられ、面倒も見ていただきました。そんなこともあり、今日まで本会に関わらせていただいた経緯でもあります。

さて、本研究会におけるこれまでの発表者数は、延べ 139 名にもなり、専門的なご研究やその当時の時事問題など多彩な話題提供をいただきました。また会の特徴である異業種交流活動には、多方面の研究者、特にお医者さんらには多くの健康と医療に

ついて伺う機会に恵まれました。さらに研究会終了後は、講師の先生を囲んで全員で情報交換会を毎回開催し、講演会では聞かれなかった話、大きな声では言えない話を伺うなど、さまざまな有意義な時間を過ごしてきました。

創設から 27 年を経て、北海道地域本部では 6 つ研究会と 2 つの実行委員会があり、それらは年間を通じて活発な活動を展開しています。その間には、北海道技術士センターは発展的に解散となり、社団法人であった日本技術士会は公益社団法人となって公益性の高い団体となりました。

現在、このような北海道本部を取り巻く環境の中で、本研究会の目的である異業種交流活動の場は、他の研究会活動に埋もれながらも当初の目的は達成できたこと、さらに超高齢化による参加者数の激減をもって活動を終了するに至りました。しかし年齢に左右されることなく意欲的な当研究会会員には、他の研究会の中で活動を継続されることを確信しております。

最後に、共に多くの活動を支えてくださった会員技術士各位には閉会のご無礼に深謝し、皆様の更なるご発展をご祈念申し上げます。

ここからは、研究会の終了にあたって、設立当初から活動を支えてくださった先輩技術士らに当時の思い出話を語っていただきます。

## ■志の高い本物の技術士集団

北海道地域本部本部長

齊藤 有司(建設/総監)

平成24年度をもって、27年間かつ128回続いた技術交流研究会活動が諸事情により終わりを迎えました。研究会員の皆様は、日本技術士会会員資格を有していることを条件に参画されました。さらに参画された皆様は、異分野の技術士相互の交流はもちろんのこと、異業種の皆様との交流の中で、高い専門的技術水準を有する技術士集団として認知されました。このことは、正しく称賛に値するものであります。

北海道支部唯一の研究会として創設され、長期に亘って数多くの足跡を残してくださったことを考えると、今はただ、歴代会長様を始め数多くの講演者の皆様に御礼と感謝を申し上げたいと思います。

私は、この研究会活動には可能な限り参加しましたが、その中でも強烈な印象を受けたものがありました。たとえば、「人工臓器と医療再生」の話題は画期的であり北大医学部松下教授の医学の未来を拓く神髄を見せていただきました。その際、松下教授のプレゼンを技術士会最初のを試みとしてe-ラーニングの実験を行いオンデマンド放映を試みました。このe-ラーニングの成功により当時の技術士全国大会(札幌)において、e-ラーニングのライブ配信に成功し、日本技術士会としても初めての成果となりました。

また、「地球シュミレーターの話」や、逢坂前衆議院議員(当時二セコ町長)による「危機管理と組織運営」などの広範囲な話題に感銘したものです。

このような活動を全国支部長会議で紹介したところ、各支部長さんからは、「このような異分野の技術士らが研究会として、定期的に、かつ、高度なディスカッションの場を持ち今なお継承され続けていることは、素晴らしいことですね」と羨ましがられ、ちょっと優越感に浸ったものでした。

そのような数多くの痕跡を残した技術交流研究会が終わりを迎えることは非常に残念ですが、その精神は必ずや北海道の後輩技術士に引きつがれ続けられることと信じております。

## ■技術士会活動で人脈を!!

元理事・前北海道支部長

大島 紀房(応理/総監)

平成元年、(旧)技術士センター総会の折、北村技術士(機械部門)から「私達の会合で何か話をして欲しい」これが技術士会本部入会のきっかけです。話をするには「日本技術士会本部会員でなければ駄目!!」。話した内容は良く覚えていませんが、会場は今の建設会館のドーコン会議室。大学での専門が地球の歴史、構造地質だったので地球の誕生、温暖化(地球規模の)、人類の出現や地震の話だったと思います。

入会時の年齢は40を過ぎておりましたが、会では断トツに若く緊張していたことを覚えています。これをカバーしてくれたのが気さくな会長の菱川さん。大変お世話になりました。

当時私の周りは業務から建設関連技術士が圧倒的に多く、機械、電気電子、化学、経営工学の方々の話は非常に楽しく新鮮でありました。そして交流会後の懇親会、同世代の会合には無い楽しい隠れ話。「異業種交流を活発に行おう!!」これが技術士会の活動、社会貢献活動にのめり込んでいった最大の原因だと思います。事実、技術会で得た人脈は今では大きな宝物となっています。本部理事会、支部長会議はもとより全国大会、北東3支部交流会は正に異業種の交流の場です。

今、技術交流研究会活動が終了することは誠に残念ですが、ここで培った“異業種交流の奥義”は、これからも人、企業、社会貢献活動の中で生かされていくものと祈念いたしております。

## ■技術交流研究会活動の思い出

前技術交流研究会会長

阿部 任(機械部門)

当時先輩の竹内靖技術士より技術士会への入会と当「研究会」への入会を勧められ、1987年(昭和62年)6月2日第6回目から参加しました。

その日は農業部門の谷本彰技術士(故人)が『河川高水敷の利用活用と管理』と題して楊柳の有効活用を熱っぽく語って居られた事を今でも鮮烈に記憶し

ています。

当時は、総勢 10 人位のメンバーが順次講師をしていたので偶数月毎の開催でしたから、その年の 12 月、第 9 回目には講師役が廻って来て、当時携わっていた『夕張市の低品位炭燃焼ボイラーによる集中熱供給』に就いて発表しました。

時の流れと共に会長も竹内⇒北村⇒三井と代わり、1989 年度(平成元年度)より菱川幸雄技術士が会長となり、1998 年度(平成 10 年度)迄続けられました。

今でも語り草となっている『菱川ニュース』、主に工業系新聞の切抜きで今日的な話題の提供がありました。その量も 1 回に B4 版用紙に 12～20 頁にも及び、一読するのに 1 時間では足りない程でした。現在手元に残っていた当時の切抜きの『燃える氷』(平成 10 年 2 月 5 日資料)の記事は、先日来愛媛県沖で産出された「メタンハイドレート」の研究と開発に就いてであって、いよいよ実現に近づいた感があります。

当時、内田辰英技術士からバトンタッチして私が平成 10 年度まで幹事を引受けました。そして若手技術士の入会が一段と増え、1993 年(平成 5 年)4 月 8 日第 41 回研究会では、22 名の会員が全員出席し、二ツ川健二技術士(故人)の『札幌市の地盤“ボーリングが知らせる大地の営み”』を聴講した資料が手元にあります。

年に 6 回の研究会開催は結構キツかったけれども、当時の菱川会長の人脈の広さのお蔭で部外講師の依頼が容易に出来、更に若手会員の成果も聴講出来ました。

その流れを受継いで、1999 年度(平成 11 年度)から 2002 年度(平成 14 年度)まで 2 期 4 年間私が会長をお引受けし、年 4 回開催、会場も Docon 本社会議室を使わせて頂きました。講演発表はプリント配布から OHP、更にパワーポイントに移り、会員への開催通知も FAX から epo-mail に代わりしました。

そして、2003 年度(平成 15 年度)から現在まで松井会長時代に至るわけです。その間私の時代から引続き幹事長役として吉野大仁技術士には大変なご

苦労を掛け、金秀俊幹事の同級生との人脈からも沢山の医学に関する話を聞く事が出来ました。

各回毎に発表された講演の抄録が「技術交流研究会 一活動実績一」として北海道本部のホームページに第 6 回目より最終の第 128 回目まで収録されて居ます。

これも曾て内田技術士が貴重な資料だからと抄録を作られ、それを今日まで引継がれたと聞いています。「工業技術研究会⇒技術交流研究会」の共有の財産として末永く保存されることを願うものです。

## ■創設時から参加して

栗林 益美(機械部門)

工業技術研究会が創設の運びになっていた時、私は三井技術士から紹介されて、顧客としての三英理工(株)の石炭・木紛系新燃料バイオリケットプラント(小平町に建設し操業を始めたばかり)の工程改善に関する仕事に携わっていた。しかし、3～6 カ月くらいのプロジェクトと想定したので其の後はどうするか思案中であった。

その研究会創設メンバーである三井技術士から誘いを受けたときは、丁度私が思案中であったこともあって諸先輩から出来るだけ情報を得る良い機会になると思って、1 も 2 もなく参加することにした。

創始時のメンバーは少なく数人程度であった。記憶に残っている人は竹内・北村・三井・向井・田尻・紫雲の各技術士である会の運営は自費でコーヒーを手配し話題提供は 1 回 / 2 月程度を持ち回りで行っていた。

異業種の集まりと言うことで、皆に理解され易い様に話題のテーマは自分の仕事に関することが中心ではあったが、ソフトで気張らない幅の広い総説的なものが多かった。なかでも、北村技術士の金属の話の中で「野幌記念塔の内部の錆が大変」と言う話は今でも記憶に残っていてどうしたかなと気がかかっている。

さらに後の佐藤隆一技術士(農業部門)による教育論は、元は高校の校長先生だった経験によるものでユニークなものであった。

もう一つは三井技術士の炭の話のなかで「木紛の

流動層炭化」と言う情報は、後に私の大きな業務実績である鶏糞炭化プラント建設のヒントになった。

当時私は前記の三英理工(株)の要請により期間を延長して技術顧問として勤めていた。たまたま同社の営業担当者が岩手県のブロイラー生産者からその鶏糞を炭に出来ないか？と命題を投げかけられたとのこと。「炭に出来ればノーベル賞ものだ」と大げさに解決を期待された。

そのニーズを三井技術士に話したところ、実験が必要だが出来ると思うとのことだった。これに力を得て三井技術士の「廃棄物工学研究所」の小型流動層試験機で実験を行い成功のメドを付けた。そしてスケールアップの基礎データを得た。

何回も鶏糞サンプルを運び、焼け糞を実験したところ幸いに炭化が可能と言う見通しが付いたので、いわゆる「やけくそ」にならないで済んだ。ブロイラー鶏糞は「オガ屑」の上に排泄されたもので、約50日毎に鶏体出荷と共に排出されるが、年間数万トンも出て堆肥化が難しく処理に困っていた。炭化すれば容量が1/3になり、その後の利用や処理がやり易くなる期待もあった。

そこで三井技術士のノウハウを基に、共同して鶏糞廃棄物を15,000t/年炭化するプラントの基本設計を行い前記の三英理工(株)が受注して岩手県に建設した。炭化は部分燃焼による自己発熱なので別燃料の使用はない。ただ400℃排ガスの脱臭は燃焼法を採ったためここではA重油を使った。

プラントは現在も稼働中であり、400℃と言う比較的低温炭化なので炉体はSS材で製作したため、補修費が少ないと喜ばれている。現在脱臭炉排ガス熱は回収利用の工夫がされたと聞いた。

研究会での話題がヒントになって、異業種技術が結びつき、開発的プロジェクトに発展して企業化された例であり強く印象に残っている。

工業技術研究会は技術交流研究会と名が変り継続した後、終了したが異業種による気張らない会が有志によってでも手弁当で話会う会が一つくらいあっても良いのかなとの感想を持っている。

## ■技術交流研究会はゆとりの空間

松浦 清(森林部門)

私はたまたま「技術交流研究会」の存在を知り、早速申し込みましたが、当時の会長が「本会に相応しいか」と吟味が厳しく、暫くかかった後、次回の交流会で専門性についての課題で発表しなさいということになり、当日発表会直後に可否の判定がないので、懇親会も落ち着かず、直に伺うと、「内容は良いが時間をオーバーしたのがいけない」と窘められ、その後の心得になったのを懐かしく思い出します。

その後の研究会は講演前に必ず、菱川会長特製の3ヶ月分技術関係新聞スクラップの輪読があり、記事関連業種会員の解説をするので緊張は続きます。会の内容が充実しているので、欠席することはなかったと思います。また、こんなことも必要だろうとキノコの菌床栽培の建屋や空調設備についてソツと教えてくれた先輩がいました。林内で榎木栽培しか実習してませんでしたから情報は大変ありがたく頂き見学にも行きました。また、私は燃料用ペレット生産工程は、パルプ工場の碎木パルプ方式を頭に描きます。足寄の工場を見学した時、唐箕風選とか米穀乾燥機など農業機械の組み合わせの工程と思いき発想に気付き、驚きもしましたが、設計者は当会の農業機械技術士であったので2度びっくりしました。こうした囁きが講演会後の懇親会や休憩時に行われていました。

CPDの記録は平成14年からあります。本会の工学部門の人たちには普通の事と感じられたことが動機で、WEB登録も始め自分自身にも要点記録となる書き物になっているのに気づき継続しています。こうした環境を醸し出している研究会に育まれたと感じています。

そんな時期、推薦があり、平成15年から1年刻みですが、4年間専修大学北海道短期大学に非常勤講師(教授)として採用されました。これは技術士資格のお蔭です。思い出すと木材利用学、応用樹木学、環境緑化樹木学で2コマでした。学生が納得する講義を目指し一生懸命努めましたが、学生の中に中国や韓国の人が出て講義中寝る人に気づき背を軽く叩き注意すると「先生の話難しい」といわれ困ったこ

ともありました。私自身成長するため、APEC エンジニアの資格取得を決意し、工学会員に聞くと当たり前のことと云われ、事務局に要点を聞きました。当時、登録制度が改定されエンバロメンタル部門・バイオ部門にも拡大された時期にも当たります。書類審査の課題は出願直前の登録 CPD 記録(和文)2年間の英訳を求められたこと、又、雇用主等の推薦状では泉武夫学長は私を Friend と書いて推薦してくれたのに特に感激しました。

今世の中、民間主導型の自立経営に向けてパラダイムシフト的な変革が始まった時ですが、長く業種が変わっても共に学び合える雰囲気醸し出し、また、交流のきっかけを作り出して呉れた本研究会の存在は非常に価値多かつたと心から感謝を申しあげる次第です。道は一つではなし、業務を副次的に支援する役目は大事に行きたいと考えています。

## ■技術といってもみんな違う技術交流研究会

滝田 和彦(経営工学)

先日、技術交流研究会が最終回と聞いて驚きました。それから、私が入会させて頂いてからのことが、懐かしく思い出されました。

菱川さんから、こういう会をやっているが、どうですかというお話があり、すぐに入れて頂くようお願いいたしました。

私が最初に参加したときは、10名程度の方が集まっていたように記憶しています。

私が入って、3回目ぐらいのときに、個人の発表をして下さいという話があり、入会の時に聞いた話でもありましたが、困感いたしました。

というのは、私は都市ガスの出身でして、全国のガスの協会の仕事で、都市ガス関係の委員会の委員などはやっておりまして、会議に出て意見を述べることはやっていましたが、自分の意見を長時間にわたってオーバーヘッドプロジェクター等を使って発表したり、最新の機器を使って説明するようなことは経験がありませんでした。

従って、全くそのような知識のないまま、見よう見真似で、テーマも環境問題でしたので、環境白書などを購入して、データの確実性を確認したり、

会社で経験のないことを懸命にやりました。

発表の当日は、本人があまり自信のないまま、本番を進めて行きましたが、何とかかんとか、聞いて下さった方々の暖かい雰囲気の中で終了させていただきました。その後も新入会員の発表を聞く機会がありましたが、やはり初体験の方もおられ、苦労の跡が伺われました。

会も最終回となって考えて見ますと、技術士としての自分の仕事を説明し、技術士としてこれからやっていきたい仕事を説明し、発表することは、採用していただくためにも、必要な仕事であり、その仕方の是非が、自分の技術士としての仕事が有効に社会に活用されるかどうか、ひいては社会の技術の向上に貢献できるかどうかにかかってくると思います。

私としては経営工学の技術士として、自分の技術の発表をする機会を与えていただいたことに、本当に感謝しております。

その後、何回か自分の技術士としての仕事を発表する機会がありましたが、上手下手は別にして、お蔭様にて、自信をもって出来たと思います。

次に、この会に感謝していることは、多くの友人が出来たことです。会社では同じ仕事の友人は当然出来ませんが、他業種の友人は無理です。

この会は、いろんな方々との話の中で考え方の出発点からの違いや、結論の導き方の違いにおどろかされました。同じ技術士であっても立っている土俵が違うと、こんなに違うのかと考えさせられました。

技術交流研究会という会を通して、技術的なこと、交流関係に大きな影響を与えて下さった、菱川さん、阿部さん、会員の方々に深く感謝いたします。

お蔭様にて、私も平成12年6月に日本技術士会の名誉会員とさせていただきました。これも技術交流研究会の皆様のおかげと厚く御礼申し上げます。有難うございました。